



依存体質から脱却し、 一日も早い自立への道を

—被災地の現実、そして地元建設業のこれから—

大船渡市

豊島建設(株) 代表取締役 紀室裕哉氏

—大船渡地域での復興事業の現状は。

防災集団移転事業が本格化し、一日も早く現場に入りたいのですが、各種事務手続きの関係で思うに任せない部分があります。行政機関も限られた人員の中で、連日の長時間残業に加えて休日返上と目一杯頑張っており、それでも間に合わないのが現状。しかし仮設住宅での生活を余儀なくされている方の立場からすれば、なぜもっと早く進めないのかと、感情的に割り切れない部分が出ていていると思います。

—市街地の復旧・復興は権利関係も複雑で、さらに時間が掛かるのでは。

JR大船渡駅周辺の開発では比較的早い段階から住民説明が始まったのですが、4メートルのかさ上げの根拠など、住民の理解度がどの程度深まっているかは未知数。また大船渡市の市街地では、仮設店舗ではなく本復旧が始まっており、複雑な補償問題もでてきます。さらにJR大船渡線では現在BRTが走っていることから、JRとの調整も必要になります。

これらの問題は、手順を間違えれば不信感につながる危険性もあります。関係者によると最短でも5年は要するとのことで、手続きの簡素化やスピードアップが必要。乱暴に事を進めてほしいという意味ではなく、簡素化できる部分はある程度ショートカットする必要もあると考えています。

—発注が先行しても、実際の現場が停滞することも懸念されます。

発注者側のマンパワー不足だけではなく、われわれ受注者側も配置できる技術者数が限られており、国、県、市町村と発注が集中した場合、技術者の手当が追い付きません。もっとも発注機関それぞれが緊急性の高い事業を行っているわけですから、お互いの状況を横目で確認しながら発注調整するような余裕は無いでしょう。

そうなるとう受注者は、技術者不足、労働者不足、資材不足の『三つの不足』に直面します。派遣社員や同業他社からの応援を受けて何とか凌いでいる会社もありますが、人件費などの上昇からコストが高止まりしています。私たちは営利企業であるのと同



震災後3日目の同社周辺の様子

時に、公共的な仕事を担う立場でもあります。初めから赤字覚悟での受注は避けたいのですが、ビジネスライクにも徹しきれないというジレンマを抱えています。

一受注者が抱える問題と同時に、発注者側の問題として、心身の健康に関する問題が上がっています。

特に県外からの派遣職員の方は、全く知らない土地に一人で着て、初めての仕事をしなければなりません。例えば内陸県の職員の方で、海の仕事を担当している人もいます。不慣れな環境の中で健康を害する人や、メンタル面の不調を訴える人もおり、ある意味で行政機関の方も被害者なのです。

加えて、子供たちの心身の健康も心配されます。各地の小中学校のグラウンドは仮設住宅になっており、子供たちが思い切り遊べる場所がないんですよ。協会の大船渡支部では、赤崎小学校の跡地に子供の遊び場を整備するための資金の一部を寄附することとしています。地域の将来を担う子供たちに、一日も早く自由に遊びスポーツに打ち込むことができる環境を提供したいと思っています。

一復旧・復興への貢献のほか、震災直後の状況をしっかり伝えていくことも建設業の役割かと思いません。

弊社の職員も、道路啓開や行方不明者の捜索支援で、多くのご遺体と接しました。本当に多くの方が亡くなったという悲惨な部分を、事実として伝えていく必要があると感じていますが、報道というフィルターを通すことで悲劇が漂白され、美談仕立てになっていることに、違和感を持つときもあります。もっと被災地のリアルな姿を知ってほしい部分は正直有ります。

実際に現地を見た人、ボランティアに従事した人は、多少記憶が風化しても、自分自身の目を見て、確かめた事実は消えないと思います。また震災直後から現在に至るまで、継続的なボランティアで被災地を支えてくれている方も多く、本当にありがたく思っています。自宅が流され、家族が犠牲になった方々の喪失感は図りしれませんが、いつまでも支援に頼りながら生きていくわけにはいきません。被災地を支えてくれる人たちのためにも一日も早く依存体質から脱し、自立していくことが大切だと思います。



人命、そして社員を守る

—終わりのないBCPの先駆者としての責任—

久慈市

宮城建設(株) 技術部 課長 佐々木 文夫 氏

—今回の震災では、多くの被害が出ました。御社はいかがでしたか。

本社への被害はありませんでしたが、当時私が所属していた港湾漁港部の事務所が被災し、1階部分は骨組みしか残りませんでした。

—御社では、震災以前にBCPを策定していたとお伺いました。震災直後の対応を教えてください。

まず本社に災害対策本部を立ち上げました。それから、陸上の工事現場の人は、揺れが収まったら現場の確認をしましたし、港湾漁港部の人以外は、BCPにあったように、各所属事務所に集まりました。中でも土木部は、国道45号の啓開作業の段取りをすぐに始めました。

—港湾漁港部では、どのような対応を。

港湾漁港部では、津波到達まで30~40分ほど時間があつたので、曳き船を沖の方へ逃がしました。ただ、港湾漁港部は、津波注意報解除まで事務所に近づくことができず、避難した高台で待機するしかありませんでした。

建物などへの被害はありましたが、港湾漁港部をはじめ、幸いにも一人のけが人も出さずにはありませんでした。

—その後は、それぞれどのような活動をされたのですか。

土木部では、停電で通信できなかったのを、直接

足で発注者さんのところに行って連絡を受け、国道の啓開作業に当たりました。特に、津波注意報解除後ではありましたが、国道45号の野田村の辺りの被害が大きく、重点的に早期に取り組みました。

港湾漁港部門は、エンジンのついていない船を沖に逃がしたほか、それ以外の作業船でもアンカーの取り方などしっかりやっていたので、一杯全損しましたが、それ以外はすぐに使える状態でした。津波注意報解除後は、各港湾や漁港関係のところの啓開作業に当たりました。

—社員の方の安否確認については、どのように行われたのですか。

震災当時は、各携帯会社の災害伝言板を使っていました。ただ、中にはつながりにくく、安否が確認できないため、上司が直接足で確認にまわるということもありました。また、停電や携帯電話の通話制限もあり、出張していた人や本社から遠い現場の人など、安否確認がスムーズに取れない事例もありました。

—安否確認についても課題があつたのですね。震災後、対応などは変わりましたか。

携帯電話のインターネットを利用した安否確認システムを導入しました。携帯電話からシステムにアクセスして状況を入力し、それをパソコンで確認できます。さらに、BCPが発動した時はそれぞれの携帯にBCPの発動と安否確認するよう呼びかける

メッセージを送るようにしました。

安否確認などでパソコンを使うので、全部門に発電機の設置もしました。パソコンや照明、暖房などが使えます。ワイファイでできる通信端末も各部門に配布しました。

一安否確認のほかに、今回の震災で感じた課題はありますか。

BCPで災害対策本部は立ちあげましたが、他の部門への具体的なアクションがなく、災害対策本部の動きが現場や各部門の方に届いていませんでした。さらに、BCPが社員に十分に浸透していなかったという反省もあります。

震災当時、私は港湾漁港部にパソコンを置き、外付けのハードディスクにバックアップをとっていました。そのような人も結構いましたが、津波により、そのデータは全部ダメになってしまいました。実は、港湾漁港部のデータのバックアップについては、震災以前から検討していましたが、具体的な対策を打ち出す前に被災してしまいました。こうした反省から、レンタルでのウェブサーバーの導入を決めました。

一大きく変わった点はそれ以外にありますか。

以前は災害対策本部が行うことになっていた発注者とのやり取りを、工事部門の方で行い、その状況を本部に報告するシステムに切り替えました。また、

新しいBCPの災害の特定では、一番最初に今回の東日本大震災津波クラスの災害を挙げています。

一社員の方に向けては、災害に備えた取り組みはありますか。

震災時のBCPの浸透が十分ではなかったという反省から、全部門でBCPのポイントを理解してもらう説明会を開いています。また、各自災害手帳を持つように指導しています。その中に、災害直後の行動が載っていますし、手帳もBCPの一環です。

一震災後、BCPはより注目を集めていると思います。震災を経験し、これから伝えていきたいことは。

建設業の場合、早期に建設会社としての職務を果たせるようにすることが、BCPの重要なところだと思います。そして、社員の雇用を守っていくことも大事です。

ただ、BCPには終わりがありません。BCPは想定を広げていくことができます。被害想定を広げ、それに対応するBCPを作成する。そうすることで、BCPをスパイラルアップさせていくことができます。

そして、訓練も大事です。訓練して体で覚えて身に付けるしかありません。人命が第一。BCPが発動したらすぐ安否確認を、という行動をすぐに取れるようにすることも必要です。



子供たちには現場での驚きと発見を

—地元住民と連携して、大型プロジェクトを推進—

大船渡市

国道45号吉浜道路工事

清水・青木あすなる特定建設工事共同企業体
所長 三原 泰司 氏

—震災復興のリーディングプロジェクトとして、通常の工事とは異なり、特別な思い入れもあるので。

私たちは外部から来ている立場であり、地元の皆様が抱える思いは、奥底の部分では理解できないでしょう。それでも多くの方から『少々のことは我慢するから、がんばって道路を整備してほしい』という励ましの声をいただいています。一日も早く落ち着いた暮らしを取り戻したいという、地元の皆さんの心からの願いを実感しています。

復興工事は、震災で傷ついた人の中、地域の中に入っただけの仕事です。復興工事の早期進展に対する期待も大きいのですが、工事が集中するため地域の負担も大きいという特殊な環境下にあります。地元の皆さんにつらい思いをさせるようなことは絶対にあってはならず、地元の皆さんと一体で工事を進めるため、信頼関係の構築が大事だと思っています。

—地元の方との関係構築に心掛けていることは。

地元の方から見れば、私たちはそれぞれの企業の人ではなく、吉浜道路に関わる人。それならば関係する企業が一体となって活動した方が皆さんにより伝わるのではないかと考え、『吉浜道路工事連絡協議会』を活動の主体としています。活動の方向性は大きく四つで『知ってもらう』『地域ニーズに応える』『地域の一員としての取り組み』『人との交流』です。

—中学生の現場見学など、体験学習などを積極的に行われていますね。

中学生の皆さんには、ただ現場を眺めるのではなく、施工の最前線の様子や技術を体感し、驚き、発見をしてほしいと思っています。道路新設工事では調査計画から工事完成まで多くの人が携わって役割を果たし、事業が進められていることを知ってもらい、自分がどの分野で社会に貢献できるかなど、考えるきっかけになればと思っています。

また、こちらでは家族や親戚が建設業で働いている生徒さんもいて、建設業が身近にある分、素直に受け止めてくれています。吉浜中学校のブログでも工事の進捗状況を紹介してもらっており、生徒さん自身が工事に関心を持っていることが分かります。



吉浜中の生徒たちによる現場見学

一子供たちから親近感を持って迎えられている様子が感じられます。

吉浜中学校の卒業式には、私と南三陸国道事務所の監督官の方と一緒にご招待していただき、入学式にも出席しました。派手なことはできませんが、こうして人と人がつながっていくのかなと感じています。

全体的に、相互コミュニケーションが形成されていることが一つの成果。地元広報にお礼の言葉を載せて頂いたり、クレームではなく、前向きな要望や提言という形で現場に対する考えを述べてくださる方もいらっしゃいます。工期は残り1年半弱。地道な活動ではありますが、地元の皆さんと価値観を共有するために手数を多くいろいろと取り組んでいきたいと考えています。



大船渡市 吉浜道路高架橋



過去は変えられない。 果たすべきは『未来責任』

— 『NEXT KAMAISHI』 挑戦し、継続していくカー

釜石市

(株)青紀土木 専務取締役 青木 健一 氏

—震災から2年余り経過しました。この間の地元建設業の働きを振り返ると。

地域の皆さんの財産が、津波により一瞬で『がれき』に変わってしまいました。仕事の中で培ってきた技術を発揮して、がれきを撤去できる唯一の存在が建設業だという自負を持ち、がれきが片付けば皆さんに光が見えるのでは、生きる希望を持っていただけののではとの思いで仕事に当たっていました。

一方で『がれき撤去でお金をもらっている』との声も聞こえました。しかし自らも被災し、ご遺体などを見つける中で日々消耗していく社員の姿を見ていましたし、津波の犠牲になった社員もいます。『お金をいただく』だけの感覚であれば、辞退したいというのが本音でした。

—地域社会における建設業の役割を再認識する場面も多かったのでは。

明日が見えない中、がれきを片付ける役割を担った私たちには、地域の未来を考える責任を感じました。弊社の社長が2011年の建設トップランナーフォーラムで講演した際、東京大学の目黒公郎教授から『未来責任』という言葉を受領しました。元に戻すだけの復旧では未来の災害から子供や子孫を守れないという趣旨で、千年に渡って存続するまちを創る仕事に携わる自分たちが、いま本気で頑張らなければ後悔すると考えさせられました。

同時に、建設業協会が本当に重要な意味を持っていることも実感しています。震災直後の道路啓開や

がれき撤去は、災害協定に基づき各社が自発的に集まる協会支部という受け皿があったからこそ、県・市との通信手段が途絶された中での連携・調整、自衛隊や警察との協力、人員や重機の編成、燃料や食料の調達や配給などが可能でした。個別企業の対応では機能不全を起こしていたと思います。

—釜石では支部間連携も注目されました。

遠野支部をはじめ、内陸から大変な支援をいただきました。将来的に内陸部で大災害があった場合、沿岸部がサポートして建設業界全体で岩手を守りながら、個々の企業が各地域で地元のために頑張っていく。この姿が理想だと考えています。

青年部にとって、今は広い視野を持った活動をすすめる上での準備期間でもあると受け止め、花巻、遠野、釜石と復興道路につながる三つの青年部で、海岸清掃など連携した取り組みを行っています。

—青木さんの場合、建設業という枠にとらわれない活動もされています。

地域の復興委員会も任せていただきましたが、若い人の参加が少ない。まちの活力が失われれば、地域で生かされる中小企業者である自分たちも生きていけないとの思いから、釜石の将来を純粹に考える団体『NEXT KAMAISHI』を2012年5月に立ち上げました。私たち建設業は、漠然とした思いを具体的なまちの形に創り上げることができます。このように幅広い分野からスペシャリストが集まること

で、最初は小石の一投でも、そこから大きな波紋が生まれてくる可能性もあると思っています。

—NEXT KAMAISHI を通じて、外部との交流の輪も広がったのでは。

震災以降、財務省の官僚から志願して釜石に赴任し副市長に抜擢された嶋田さんの繋がりや東北復興新聞やRCF復興支援チームなど、多くの方が全国から釜石を応援してくれています。またUBSの定期的な来釜による地域の自発的な元気・魅力創出支援、Googleによる企業の無料ホームページの作成支援など、世界的な企業も釜石入りしています。それも単なる一過性の施しではなく、地域の自立を促す形でのサポートで、本当に感謝しています。

全国からのご厚情と応援に対する恩返しは、一つはそれぞれの企業が確実に会社を再建すること。もう一つは、悲しみや苦しみも含めて震災で得た思いを確実に伝えていくこと。誰かの未来に対して、少



青葉ビル前

震災翌日



完成後

しでもお役に立てるのならばと思います、県外での講演や、県外からの視察のご案内、また会社HP、ブログなどを通じての情報発信をしています。

—このような取り組みを経て、地域の方が建設業に向ける視線に変化は見られますか。

NEXT KAMAISHI が会議を開く青葉ビル前は、震災翌日は本当に酷い状況でした。復旧工事を弊社が任せていただいたのですが、会議の度に会員がその対比写真を見せて私の仕事を紹介してくれるのですが、この工事を皆さんが本当に価値があると認めてくれています。また、NEXTの事務局でもあり、日本一高い値段で仕入れ、日本一高い値段でこだわりの『泳ぐホタテ』を販売するヤマキイチ商店さんが被災から復活する為に施工させて頂いた海水引込配管工事の様子を全国に情報発信してくださり、建設業への認知を高めてくれています。

その反面、私たち自身「建設業は必要だ」と言い過ぎていないかと、危うさも感じています。震災があったから建設業が必要なのではなく、建設業は以前から必要な産業だったのです。この部分を、謙虚に伝えていく必要があると思います。

—継続していくことも重要ですね。

あるセミナーで聞いた「やりたい人10,000人、始める人100人、続ける人1人」という言葉が、本質を突いていると思います。以前はやらない言い訳、できない理由を探していただけだったのかもしれない。

過去は変えることはできません。だからこそ未来責任を果たしていくことが大切。地域の中で若い人たちが責任を持って生きていけるよう、そして新たな町が出来上がった後も建設業が存続できるよう、もっと多くの若い人の思いを拾い上げて、取り組みを続けていきたいと思っています。



多くを失い、マイナスからのスタート

—終わらない震災の記憶と向き合いながら—

宮古市

長沢産業(株) 佐々木 チエ子 氏

—震災から2年が経過しました。会社の状況をお聞かせください。

震災で、社屋が流され、重機も車もほとんど流されました。今はプレハブで仕事をしています。さらに、物がほとんど流されているので、必要なものをそろえなければなりません。

—ほぼゼロからのスタートなんですね。

私たちのところは、失ったものをそろえることから始まるので、むしろマイナスからのスタートです。前は自社の機械などがあり、その中で仕事をしていました。やっぱり自社のものがあつた方が、段取りがつけやすいです。今は、以前のようにはいきません。

—そのような状況の中で、今思うことはどんなことですか。

この会社は父が作った会社です。多くのものを失い、自分たちの力でやっていくことで、父の大変さがわかります。資金繰りもケタが違うし、未知の世界だけれど、次の世代に何か残していけたらと思います。

—復興に向け、今必要なことはなんでしょうか。

優先するのは、生活の場ではないでしょうか。仮設住宅に住んでいる人たちが、自分たちの居場所を持つことが一番最初なんじゃないかと思います。実際に家を建てる能力のある人もいます。けれど、土地がなかったり、高かったりして建てるできません。そういう人たちを優先してもいいのではないかと思います。

—震災を経験し、今感じることはどんなことですか。

被災した人とそうでない人では、同じ市内でも感覚が違うと思います。私たちにとって、まだ震災は続いています。震災後、人の欲がより見えてくるようになってきました。世の中、本当に欲だとも思いました。復興に向けていろんな問題があるけれど、結局は人の心では、と思います。

—最後に、これから伝えたいことは。

逃げるという気持ち。そして勇気をもって「逃げよう」と言うことが大事だということです。私は、まさかこんな津波が来るとは思いませんでした。だから、逃げる感じがしなかった。主人の一言でみんな逃げました。生きていれば何でもできる、そう思います。